

霞 富士雄 (著)

乳がん視・触診アトラス

秋山 太

(癌研究会癌研究所病理部臨床病理担当部長)

まさに圧巻である。本書を開いてしばらく言葉が出なかった。名医・霞富士雄先生らしい本だと思った。

癌研では写真室（高野勝美氏、佐惣賀一男氏、加藤茂晴氏）の協力により、多忙を極める日々の診療の中で患者さんの写真が撮影されている。学会や雑誌での症例報告の際にその写真が使用されるが、このような本として世の中に出てくるとは想像もできなかった。膨大な数の非常にきれいで貴重な写真は保存されているものの、臨床情報との照らし合わせの作業や編集作業には想像を絶するご苦労があったと思う。本書のはしがきにそのご苦労がにじみ出ている。

最近の霞先生の不隠な動きは察知していた。御茶ノ水から有明に

通われていること、霞先生から私に時々妙な問い合わせの電話があること、などである。この本を見て、不隠な動きの理由がわかった次第である。霞先生とは1986年に初めて癌研大塚病院でお会いし、その後いろいろとご指導を受けているが、この本を通じて霞先生にまた何かを教えられたような気がしている。何かとは、知的好奇心と情熱かもしれない。

私は顕微鏡で乳癌を見ていて、「乳癌に同じものはないな」と日々実感している。先生が乳房の写真进行分类・整理する際には、試行錯誤が繰り返されたものと思う。肉眼で乳房に変化のある症例の写真集であり進行癌が主体となるが、その目次は「軽度の皮膚変化のある乳がん」、「中等度の皮膚変化の

ある乳がん」、「進行乳がん」、「超進行乳がん」、「炎症性乳がん」などとなっている。本書のはしがきは、「一臨床医として黙々と乳がんの診療を長い間行ってきた経験と、それから得られた知識の集積が、これからの乳腺疾患研究を志す若い学徒の一助になってくれるよう願って本書を世に問う」という文章で締めくくられている。本書は乳がん視・触診アトラスの金字塔であり、若い学徒に資するところ大であることは確実である。

本書では霞先生命名による『“どうしてこれまで”がん』に代表されるような進行癌が多くを占める。乳癌を撲滅するには早期発見・早期治療が重要であり、まずは『“どうしてこれまで”がん』をこの世からなくすことが大切である。逆説的ではあるが、この本が博物館的な価値を持つような時代がより早く到来することを願ってやまない。

●A4/頁 324/2009 年/定価 17,850 円 (本体 17,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00804-4]
医学書院 刊